令和３年１１月３０日
横浜市立南本宿小学校
校　長　西尾　琢郎
Ｎｏ．５　５　０

学校だより

教育の現在・過去・未来

校長　西尾琢郎

さる 11 月 12 日、来年春に本校へ入学してくるお子さんたちのための就学時検診を実施しました。当日はお天気にも恵まれ、元気な子どもたちが、おうちの方と一緒に本校の門をくぐりました。現時点では、ここ数年の中でもっとも多くの入学者数が見込まれています。今から春が本当に楽しみです。

さて、今回みなさんにお伝えしたいことは、タイトルにもありますとおり「支援教育」のこれまでと現在、そしてこれからについてです。もともと教育というのは、子どもたちの育ちを支援するものです。その意味では、すべての教育活動が支援教育だとも言えますが、ここでは、通常の教育活動に上乗せされる支援についてお話ししたいと思います。

皆さんが支援教育と耳にしたとき、最初に思いうかべるのが支援学級のことではないかと思います。全国的には「特別支援学級」と呼ばれていますが、横浜市では「個別支援学級」と呼んでいます。これは単なる名称だけのことではなく、本市の支援教育の根幹にある考え方を表したものですので、まずそのことからはじめましょう。

そもそも「特別支援」という言葉は、どのような意味でしょうか。それは（他の子どもとは違った）「特別な手助け」という意味合いを持っています。しかし本来、子どもたちは一人ひとりがまったく違った存在です。誰もがみな特別で大切な一人なのです。とは言え、多くの子どもたちが一堂に会して学ぶ学校では、どうしても「個」より「全体」に目を向けた活動を行わざるを得ない場面が生じてしまうことも事実です。そんなとき、「全体」に向けられた先生の声かけを、自分ごととして受け止めて行動できるお子さんと、それが苦手なお子さんがいます。しかしこれは優劣の問題ではなく、自分の外から来る情報をどのように処理するかという認知特性などにも関わってくることが知られるようになってきました。本当は一人ひとり違う（ですから決して「特別」ではない）さまざまな特性を丁寧に見取りながら、個別に必要な支援を行っていくのが、支援教育のあるべき姿だと、私たちは考えています。「特別」支援から「個別」支援へ。小さなことに見える本市の支援学級の呼び名が、こうした考えに基づくものだということを、ぜひ知っておいていただきたいと思います。

一方、本校では別途、「特別支援」という活動にも取り組んできました。これは、支援学級以外に在籍するお子さんが、特定の教科や活動において「困り感」を抱いている場合、その内容に即して教室内で担任以外の要員による補助的な支援を行ったり、少人数（１名～数名）での別室指導を行ったりするものです。人前ではできないことが一人ならできる、といった経験は、多くの方がお持ちだと思いますが、学習においても、読む、書く、話す、聞くといった活動それぞれの得手不得手のバランスなどによって、「少人数」や「教わったり、考えたりする手立ての変更」によって、大きく伸びる可能性を持った子どもは少なくありません。個別支援学級が多くの場面で個別の支援を行うものであるのに対して、特別支援は、限定的な場面において支援を行うことから、それを「特別」と呼んでいるのです。

繰り返しになりますが、子どもたちは誰一人として同じであることのない「特別」な存在です。その一人ひとりの子どもが一番自分らしく生活し、学ぶことのできる場を、私たちは提供していきたいと考えていますし、保護者の皆さんにも、ぜひお子さんの目線に立って、学びの場や手段を、その時々に応じて柔軟に選んでいただきたいと願っています。

支援教育のこれからの姿と言われる「インクルーシブ教育」は、学びにくさや障害といったものに限らず、国籍や性別、思想信条など、より幅広い多様性を超えて、共に学ぶという趣旨のものです。ただしそれは、力ずくでひとつところに子どもたちを押し込めたり、同化を強要したりするようなものであってはなりません。集団で、少人数で、個別で。鉛筆とノートで、タブレットで。学ぶ形にも手段にも選択肢があり、子ども自身がそれを選び取れることが理想だと思います。課題はなお山積みですが、学校はそうした多様性と選択肢を包み込む、大きな風呂敷のような存在でありたいと願っています。支援教育やインクルーシブ教育については、まだまだお伝えしたいことがたくさんあります。皆さんのご意見も、ぜひ学校までお寄せください。